

隠岐島前高校郷土部収録 再話Ⅱ酒井董美^{ただよし}

(出雲かんべの里館長)

海士町の民話から (6)

おとし

大歳の夜

語り手：徳山千代子さん
(保々見 明治37年生)

昔々、あるところにたいそうなお金持ちの家があり、近くには貧しい貧しい一軒の家があり、そこにはおじいさんとおばあさんが暮らしておりました。お金持ちの家では年の瀬が迫ったというので、お餅をついて下女や下男や年男を呼んで、とてもにぎやかに騒いでおりました。

一方、おじいさんやおばあさんの家では、餅をつくどころではなく、年越しをするのに粟(あわ)一升しかなくて、「まあ、じいさんよ、困ったもんだなあ。粟一升あつだけん、粟の粥(かゆ)でも炊いて食べらいいけど、神さんや仏さんに供えるもんがなあって、困ったもんだなあ」と言いますと、じいさんも、「そげだなあ、困ったなあ」と言つて、二人が思案していたけれど、一度に声をあげて、「あつたあ」と庭を指さしました。そこには今年の正月に焚く炭が一俵だけ転がっておりまして。そのおじいさんやおばあさんは、普段、炭を焼いたり、薪を取つたりして、村へ持つて行つて売つて、それでどうなりこうなり生活をたてておりました。

「じいさんよなあ、あの炭を売つて仏さんや神さんに供えるもんでも買わだないか」「いや、わしも今それ、思い出して言つただわなあ」「ああ、そりゃ

いいことだ、いいことだ。そんなら、じいさん、ご苦労だ。どのう、村へ行って寒いだだいど、売つて何でも買つてきてごさつしやいな」「ほんなら、行きたくつけんあ」。

そう言つて、おじいさんは寒い中を素足にワラジを履いて、その炭を売りに出ました。

片一方の長者の家にはみすばらしい老人が門に立つて、「三日も食べんとおつて、お腹が減るし、寒いし、凍え死にそうなから、何でもいいから恵んで」と言つたら、年男が出てきて、「まあ、ちよつと待つとれよ。旦那さんに聞いてくつけん」と言い、それから旦那さんに聞いてから戻つて来て、「旦那さんがなあ、おまえのような乞食にはなあ、捨てるもんがあつてもやるもんがないけん追い出せ、言つたけん、出て行け」と、その乞食を追い出して門を閉めて入つてしまつたつて。

そこでどうしようもないから、その老人は、困つたもんだと思ひながら、凍え死にそうになつて扉にすがつてうつむいておつたところへ、炭売りにきた貧しいおじいさんが通りかかつて、「ちよつとちよつと、じいさんや、なあせそげしてごさる。具合いでも悪いこたあねえかの」と言つと、「具合は悪くねえだぞ、腹がすいてな、わしや凍えそうになつて、この家がえらい餅ついてにぎやかにしてあり、いろいろとよけいあるもんだけん、わしに食わすもんはあらあわなあ、ご飯一杯も呼ばりようか思つてなあ、頼んでみたけど、『乞食に食わせるもんはない』言つてなあ、ここへ追い出されて戸を閉められてしまい、どうしようもなあって、ここにこうしてしゃがんでおつたようなことだあね」と答え

た。それを聞いた貧しいおじいさんは、「ともかく何もないけど、わしのところへ行かあや」と言つと、「ほんなら、世話になろうか」というようなことで、おじいさんはその老人を自分の家へ連れて帰つたつて。

「今もどつたわい。ばあさん」「やれ、もどらしたか。寒かつただらあがや」「おお、寒かつたけど、いいことしたわい」「ああ、そぎゃかの、えらいいいことさしたのう」そうして、老人を家へ入れたら、その老人は気の毒がつて、庭の隅のムシロの上に座つて、「わしや、ここでもいいけに、ここに置いてもらうけに」と言つて一服したけれども、おじいさんやおばあさんは、「まあ、何ちゆうこと言わつしやる、この寒いに。年寄り炬燵(こたつ)に当たつとつても寒いに、そげなところへ座つとりや冷えてしまつけに、はや、ここに上がらつしやい」と二人で手を取つて、老人を座敷に上げてやつて、どどん薪を焚いて当たらしてあげたつて。

「じいさん、何ぞ買つてごさつたか」「おお、炭売つて米一升買つてきたけに、はや、これを炊いてこの人に食べらしてやれよ」「おお、じいさん、そりやいいことをした。いいことをした」「明日の正月はどげでも、今夜が正月だ。さあ、お客さんがござつた。いい正月だからお粥を炊いて、お客さんにたくさん食べさせてあげようや」というようなことでお粥を炊いて、「さあ、食わつしやい。さあ、食わつしやい。腹いっぱいになつても食わつしやい。容赦(遠慮)すんなつしや」。

こう言つて、二人がその老人をとともだいにしして、お腹いっぱい食べさせて、寝るときには一枚だ

けの煎餅布団をその老人にかけてあげて、自分たちは庭の隅にあつたムシロを取つてきて、二人仲間に着て寝た。

それから、朝、目が覚めてみたら、老人は藻抜けのカラで姿が見えない。

「おかしなことだなあ、じいさんよ。あのおじいさんはおらんわい」「どげ言うことだ。この寒いにごどだい行くところもねえに、出て行かしたたらあか。容赦な(遠慮する)人だなあ」と言いながら、二人がふいと庭に降りて、あたりを眺めたら俵が三俵ね積んであり、その上にお供えの餅が四重ね積んであり、そしてそばに小判十枚入った袋が乗せてあつた。

「こりゃありがたいことだ。あのおじいさんは乞食じゃない。あれは金(かね)の神さんだわあ。われわれの心見にごさつたらあか」というやなこと、そいで喜んで近所の人を呼んで、「夕べは金の神さんがうちに泊まらして、お粥食べさしただけに、こげえなようけ、何百倍にしてもどしてくれただけに、われわれだけ食べては罰が当たるけに、さあ、みんな来て食べてください。他の人も少しづつでも持つて帰つてくください」言つて分けてあげて、そして祝つたそうです。

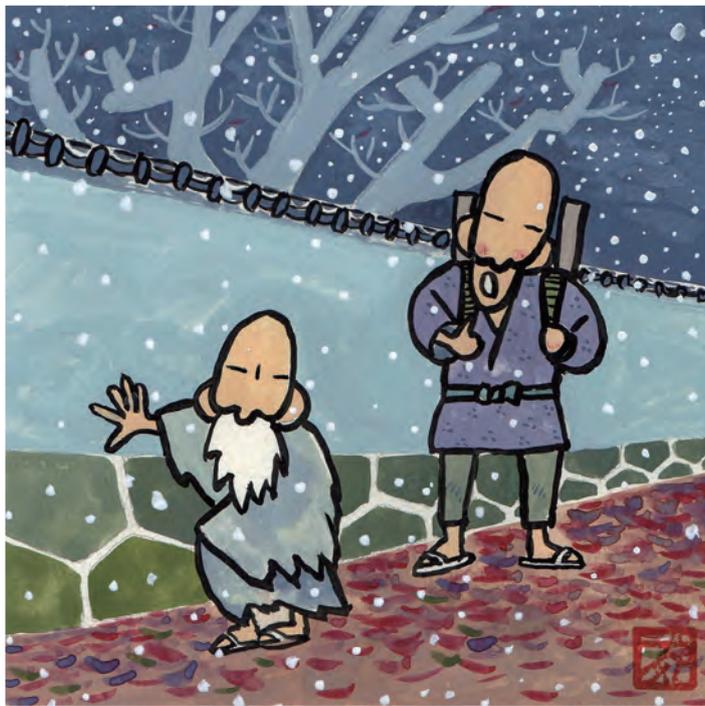
そしたら、もう片つぼの分限者の方は、正月の五か日が過ぎたら、売り家の札がかかつて門が閉まつちよつたそうです。

そいで部落の人がみんなが、一斉に声を合わせて、「普段から欲な人で捨てるものがあつても、人によんの嫌な人だつたから罰が当たつただなあ。あんたたちはな、なんぼ貧乏しちよつても、人を勞つ

てあげただけん、金の神さんがちゃあんとあんたたちの心を見込んで、そして助けしてくれたんだなあ」。みんなが喜んだり喜ばれたりして、ほいで、そこはだんだんだん困つたりしちやあお米が入つたりして、安楽に長生きされたそうです。

そんなお話でした。(昭和52年4月23日収録)

聞き手：上谷千代美、宇野多恵子、上田和代、吉本千恵子、酒井董美



絵：福本隆男(崎出身、三郷市在住イラストレーター)

【解説】「大歳の客」と呼ばれる話である。歳神が乞食に姿を変えて人々の社会を訪ね、よい人かどうかを試し、貧乏ではあつても心のやさしかった老夫婦に幸せを授けるといふ図式になっている。

まず、関敬吾博士の『日本昔話大成』から、この話の大筋を紹介しておこう。

199A 大歳の客(AT750A)

1、貧乏人な夫婦が大年の夜乞食を泊めて親切にする。乞食は(a)翌朝黄金になつている。(b)井戸に落ちたので引き上げると金。2、隣の金持ち夫婦が翌年の大年に乞食を捜してきて無理に泊める。(a)乞食は汚いものになる。(b)井戸に落ちたのを引き上げてみると牛の糞。(c)蛇になつて二人をむ。(d)乞食は蛆になる。(e)死んでいる。(f)金にならないので殺す。

この全国的なタイプから、保々見の話を当てはめてみるならば、もともとは長者も隣人タイプとなつて、翌年の大歳(大年)に失敗する話だつたのだろうが、伝承の過程で改変されて没落してしまつていたのであろう。

語り手の徳山さんは、保々見地区で一人で生活しておられたが、いつも明るく私たちに協力的だつた。そして昔話の語り方は実にキメ細かく、温かい雰囲気の中で楽しく聞かせていただいたものであつた。かなり大きい男女一対の幼児の人形が、常に籠の中に置かれていたことを思い出す。最初見たときは、この人形はまるで生きていふような感じだつたので、ちよつと異様に思ったものである。寂しい一人暮らしのつれづれの慰めに、それは飾られていたのであろう。今も懐かしく当時の様子が思い出されるのである。

※大歳とは、一年の境目、すなわち大晦日から元旦にわたる時間、及びその行事をいい、「大つごもり」、「歳夜」、「歳の夜」、「歳越し」などともいう。